

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720228

研究課題名（和文） 日本人英語学習者による代名詞と冠詞の習得：文脈の影響

研究課題名（英文） The Acquisition of Pronouns and Articles by Japanese EFL learners: Influence of Context

研究代表者

山田 一美（YAMADA KAZUMI）

関西学院大学・理工学部・専任講師

研究者番号：90435305

研究成果の概要（和文）：冠詞習得に関しては、日本人英語学習者は、限定、非限定の文脈で正しく冠詞を選択できたが、明示的否定知識が含まれる文脈では誤りがみられた（定冠詞の過剰使用）。これはロシア人英語学習者と同じ誤りであった。このことから、冠詞選択のパラメータ（ACP）へのアクセスが限られる場合があるという習得に関する一般化が導き出された。さらに、代名詞習得に関しては、主語・目的語位置における非顕在的な要素を解釈する際、日本人英語学習者はスペイン人日本語学習者よりも *sloppy* 読みを許容した。この結果から、非顕在的な要素の統語ステータスが、日本語では項削除であり、スペイン語では空代名詞であることが明らかになった。本研究は、構文を超えて「文脈」の中で冠詞と代名詞の解釈を考慮して学習者の L2 習得過程の検証を行う重要性を示し、また、第二言語習得理論、言語学理論の両見地からも L2 習得のメカニズムを探ることができた。

研究成果の概要（英文）：In our study of article acquisition, the Japanese EFL learners could choose an article correctly in both definite and non-definite contexts. However, in a context with an explicitly denied knowledge, they made errors (overproduction of definite articles). This error was also observed in the L2 grammar of Russian EFL learners. This cross-linguistic evidence indicates that there is a case where the ACP access is limited. Moreover, in our study of pronoun acquisition, when the Japanese EFL and Spanish JFL learners interpreted null elements in subject and object positions, the former allowed sloppy reading more than the latter did. From this result, it was found that the syntactic status of null elements differs in the two languages; argument ellipsis in Japanese, null pronoun in Spanish. The current study suggests it is important that the acquisition of articles and null elements are examined in discourse, not within a sentence. Furthermore, our study could explore a mechanism of L2 acquisition from the views of SLA and linguistic theories.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

キーワード：第二言語習得、冠詞、特定性、Article Choice Parameter、Fluctuation Hypothesis、非顕在的な要素、項削除、空代名詞

1. 研究開始当初の背景

(1) 生成文法を枠組みとする第二言語習得研究の分野では、言語使用とディスコースに関する研究が注目を浴びており (代名詞研究、Filiaci, 2003; Belletti, Sorace & Bennati, 2005; Sorace, 2007; Zizyc 2008 他。冠詞研究、Ionin et al, 2004; Hawkins et al. 2006; Snape, Leung & Ting, 2006; Zdorenko & Paradis, 2008; Zhang & Ma, 2009; Serratrice et al., in pres他)、本研究で扱う「代名詞」や「冠詞」も、その使用がディスコースに関わるものである。さらに、「特定性」の概念を含む文脈に着目し、「代名詞」と「冠詞」を結びつけた検証は、成人日本語話者による英語習得においては代表者の知る限りこれまでなされてはいない。

(2) もし、日本人母語話者の代名詞および冠詞の習得に関して母語の影響が見られたら、それは「特定性」に関わる共通の統語の問題が含まれている可能性の示唆へつながると考えられ Saito (2002) が提案している The Derivational Configurationality Parameter が関係している可能性が考えられる。スペイン語やイタリア語などヨーロッパ言語に見られる主語省略 (covert pronoun) とは異なり、日本語の covert pronoun は、上記パラメータによって派生のどの時点においてもその具現形を挿入できる。よって、省略された名詞句は LF で挿入可能となり、文中では省略されているが (音形を持たないが) 実際の意味解釈は可能となる。また、冠詞についても、LF で「あの」「その」が挿入可能なため、名詞の前に何もつかなくても「特定」の意味解釈が可能となる。従って、上記パラメータの下では、代名詞と冠詞の両方の問題が関係している。

2. 研究の目的

(1) 日本人大学生が代名詞や冠詞の理解や使用に問題を抱えているとしたら、どの部分が難しいのか、母語はどの程度影響するのかということをも第二言語習得理論の観点から明らかにする。

(2) 日本語母語話者の英語習得の過程において、単純に教師から習うだけではない要素が含まれている (=習得のメカニズムが働いている) ことを言語学的な立場から明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 冠詞の習得

言語習得のメカニズムを探ることを踏まえ、Ionin et al. (2004, 2009) が提案した Article Choice Parameter (ACP) という意

味的なパラメータとそれに付随する

Fluctuation Hypothesis (FH) の枠組みを用いて、日本人大学生が限定性と特定性が関わる文脈で、英語母語話者のように冠詞 (the と a) を正しく使用できるかどうか調査する。

表 1 英語の冠詞の分布

	+限定性	-限定性
+特定性	the	a
-特定性	the	a

表 2 Article Choice Parameter による区分

	+限定性	-限定性
+特定性		
-特定性		

実験方法は Ionin et al. (2004)、Ionin et al. (2009) で用いられた強制誘出法の選択式筆記タスクを参考にした。調査対象者はターゲット文中の可算名詞 (単数) の前にある a/the/∅ の中から適切なものを選ぶように指示された。タスク実施時に時間制限は設けなかった。

議論に重要な文脈タイプ例を以下に示す。

タイプ 2 [+限定, -特定]

動物園のためきが、3日前にとつぜんいなくなりました。ためきのおりのカギがこわされていたの、だれかがためきを盗んだようです。こどもたちは、動物園の人にその後どうなったのか聞きました。すると動物園の人は、The police is trying to find (a, the, __) suspect. といいました。

タイプ 4 [+限定, -特定]

トムがジョンをさがしています。トムはさつき、ジョンがメアリーと話していたのを思い出したので、ジョンが誰に会いに行ったのか、メアリーに聞きました。すると、メアリーもあまりよく知らないようで、John went to see (a, the, __) manager of a base ball team. とだけ答えてくれました。

タイプ 6 [-限定, +特定]

モニカは 9:00 の飛行機で空港に着く予定です。メアリーは空港までモニカを迎えに来ました。モニカのかみの毛は赤いので、すぐに見つかると思いましたが、空港はとても混んでいて、見つけられません。そこでメアリーは近くにいた空港の係りの人に I want to find (a, the, __) red-haired girl; her flight arrived at 9:00. といいました。

被験者は日本人大学生 19 人、及び、英語母語話者 3 人 (統制群)。タスク手順は、文脈を与え、それに続く英文中の冠詞の選択肢 3 つから 1 つを選択してもらうというもの。

(2) 代名詞の習得

本研究の目的の一つは、日本人英語学習者による代名詞の習得を Saito (2002) が提案している The Derivational

Configurationality Parameter の枠組みで検証することであった。しかし、その後の理論の発展により、Saito (2007) の提案である項削除の分析をもとに検証をする必要が生じた。本研究は理論に則った第二言語習得研究であることから、新しい理論をもって実験デザインも考え直すことになった。実験結果に関しては、非顕在的な要素を代名詞 (pro) ととらえるのではなく、項削除という観点から分析することになった。

実験データ収集には文法性判断タスクを用いた。実験の対象は日本人大学生 (23 名) と、スペイン人日本語学習者 (19 名) で、後者の被験者としての必要性は、スペイン語では主語位置に現れる非顕在的な要素が pro と考えられており、日本人大学生の英語習得とスペイン人学習者の日本語習得を比較することは、当該の 2 言語の非顕在的な要素の統語ステータスに関して新しい証拠を提供できることである。統制群として英語ネイティブおよび日本語ネイティブが各 11 名参加した。

タスクは日本人、スペイン人グループともに 12 の文タイプ、計 36 (1 タイプにつき 3 × 12) のアイテムを含む。12 の各文タイプにおける顕在的な要素の内訳は以下のとおり。

2 つの文脈 (sloppy/strict)

2 つの位置 (主語・目的語)

3 つの先行詞 (日本人: one's own, s/he)
(スペイン人: 自分/彼/彼女)


$$\rightarrow 2 \times 2 \times 3 = 12$$

日本人グループは、ともこは英語を勉強しているが、あまり得意ではないと説明され、スペイン人グループは、Huang は日本語を勉強しているが、あまり得意ではないと説明される。以上を踏まえ、被験者はともこ、あるいは Huang が絵について説明する文を、文法的かどうか判断する。

実験アイテム例

● 日本人グループ

(sloppy × 主語 × one's own)




ぼくの学生ね、試験に合格するよ。優秀だからね。

トム
たろう
1



ぼくの学生も、合格するよ。頭がいいからね。


2



Taro is saying his own student will pass an exam. Tom is also saying will pass the exam.

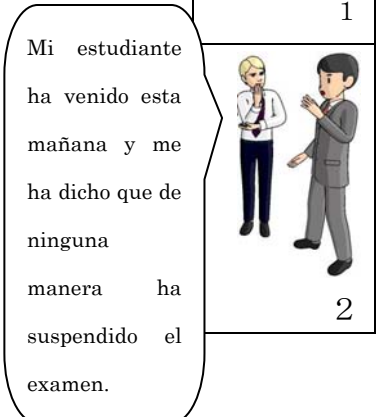
○ correct × grammatical

● スペイン人グループ (sloppy × 主語 × 自分)




トム
たろう
1

Mi estudiante vino ayer y me dijo que le había ido bien en el examen.



Mi estudiante ha venido esta mañana y me ha dicho que de ninguna manera ha suspendido el examen.

2



たろうは 自分の 学生が 試験に合格すると 言っています。はなこも 試験に合格すると 言っています。

○ Correcto × Incorrecto

4. 研究成果

(1) 冠詞の習得

①結果と考察

英語母語話者：各文脈で正しい冠詞が選択された。よって、ACPの2つの設定の間での変動はなくACPが限定の設定（英語）であることを示している。タイプ4の明示的否定知識にも左右されなかった。

日本人大学生：全体的に限定・非限定の文脈で正しく冠詞を選択した。限定の文脈では、タイプ4を除き60%の割合で正しくtheを選択した。5つのタイプ間にはtheの選択に関して統計的に有意差が確認されたが ($F(4, 72) = 23.027, p < .001$)、タイプ2, 3, 5の間では有意差は確認されなかった。タイプ4でaを過剰使用したがこれはタイプ4に明示的否定知識が含まれており、それに敏感に反応したことが考えられる (aを選択した割合は77.6%)。よって、ACPアクセスよりも明示的戦略が働くというIonin et al. (2009)の主張を支持する結果となった。ここで、山田・宮本(2010)における児童学習者の冠詞習得結果と比較してみると、児童はタイプ4の明示的否定知識には左右されないことが確認されている。

一方、非限定の文脈では、表のとおり成人学習者は70%以上という高い割合で正しい冠詞を選択した。

表3 非限定の文脈における冠詞選択

	Contexts	<i>the</i>	<i>a</i>	Ø
Type 6	[-def +spec]	18/76 (10.5%)	56/76 (73.7%)	2/76 (2.6%)
Type 7	[-def -spec]	5/76 (6.6%)	55/76 (72.4%)	16/76 (21.5%)
Type 8	[-def +spec]	14/76 (10.5%)	58/76 (76.3%)	2/76 (2.6%)
Type 9	[-def -spec]	3/76 (3.9%)	57/76 (75.0%)	16/76 (21.5%)
Type 10	[-def -spec]	4/76 (5.3%)	63/76 (82.9%)	9/76 (11.8%)

5つのタイプの間では、aの使用に関する統計的な有意差は認められなかった ($F(2, 539, 45.706) = 0.390, p = 0.728$)。成人学習者はタイプ6と8でACPの2つのパラメータ設定間を変動するようなふるまいは見せなかった (theを過剰に使用しなかった) が、その理由としては成人学習者のACPの設定がすでに限定になっていることが考えられる。一方、山田・宮本(2010)の児童学習者は、タイプ6と8でACPのパラメータ設定間を変動するようなふるまいをし、パラメータ値が

設定されていないことが明らかになった。

②教育への示唆

本調査の結果から、冠詞の選択に関して成人学習者は[-限定, +特定]の文脈で明示的否定知識に影響されてしまうことが確認された。実際の教育現場で冠詞を教える際には、明示的否定知識を含んだ文脈を提示して注意を促すことが適切だと思われる。

文脈によって習得の違いがあることは、日本人児童英語学習者を対象として疑問詞 how many の習得の予備調査を行った Yamada and Miyamoto (2010)でも指摘されている。児童たちは、特定の文脈では how many + 名詞を文頭に出した文を正しいと判断し、how many のみを文頭に出した文は誤りであると判断できたにも関わらず、非特定の文脈では how many のみを文頭に出した文をかなり高い割合で正しいと判断してしまった。この調査結果から、Yamada and Miyamoto は、学習者が how many を習得したかどうかを確認するためには、非特定の文脈も考慮する必要があること、そして、教室内では学習者が間違えてしまう文脈を取り入れて教授することが重要であると主張している。

教室で冠詞を教える際にも、児童が間違いやすい[-限定, +特定]の文脈を取り入れていくことが大切である。多くの中学生用教科書は、不定冠詞aを「1つ(の)」「1人(の)」と説明するに留めているが、たとえばNEW CROWN 1 (p. 105)のように「初めて話に取り上げるときや、同じ種類のものの中から1つを取り上げて話題にするときに使う。」と補足しているものもある。この下線部の説明は、児童が間違いやすい[-限定, +特定]の文脈に関係している。

教科書中の不定冠詞を含むダイアログに焦点をあててみると、[-限定, +特定]の文脈を含む場面は中学校1年生の教科書ですでに紹介されている(例えばNew Horizon 1:53)。学習者が[-限定, +特定]の文脈で正しい冠詞 a/an を意識するようになるためには、[-限定, +特定]の文脈を取り入れた練習問題に多く取り組ませることが必要であろう。アウトプットを多く行うことにより、学習者が英語と日本語の冠詞システムの有無に気づき、意識的に考えることにつながると考えられる(Swain 1998)。しかし、練習問題を多くこなすことによって確実に習得できるということではなく、あくまでも習得を促進することにつながるといえることである。

さらに本研究の結果は、山田・宮本(2010)における児童英語学習者の冠詞習得の検証結果とも比較ができる。児童英語学習者は限定の文脈で正しく the を使用できたが、[-限定, +特定]の文脈では the を過剰使用することが確認された。よって、児童と成人ではその振る舞いに違いがあることが明らかにな

った。興味深いことに、この違いは Ionin et al (2009)における成人および児童のロシア人英語学習者でも確認されている。このことから、習得に関する一般化が導き出された。

(2) 代名詞の習得

日本語の非顕在的な要素を項削除の観点から分析を行った。もし学習者が彼らの L2 文法で空主語・空目的語を許容すれば、日本人英語学習者は sloppy 読みを許すが、スペイン人日本語学習者は許さないという予測が立つ。

①結果

統制群グループ（ネイティブ日本人話者・英語話者）の結果は、日本語では空主語・空目的語を文法的と解釈し、英語ではそのような文は非文法的であると解釈された。よって実験文に問題はみられない。

表4 文法性判断タスクにおける容認率

文タイプ	日本人学習者
1 空主語 (one's own)	59.4 (41/69)
2 空主語(his) × slop	26.1 (18/69)
3 空主語(her)	62.3 (43/69)
4 空主語(one's own)	46.4 (32/69)
5 空主語(his) × str	55.1 (38/69)
6 空主語(her)	44.9 (31/69)
7 空目的語(one's own)	65.2 (45/69)
8 空目的語(his) × slop	82.6 (57/69)
9 空目的語(her)	63.8 (44/69)
10 空目的語(one's own)	56.5 (39/69)
11 空目的語(his) × str	58.0 (40/69)
12 空目的語(her)	63.8 (44/69)

文タイプ	スペイン人学習者
1 空主語(自分)	40.4 (23/57)
2 空主語(彼) × slop	22.8 (13/57)
3 空主語(彼女)	45.6 (26/57)
4 空主語(自分)	42.1 (24/57)
5 空主語(彼) × str	54.4 (31/57)
6 空主語(彼女)	49.1 (28/57)
7 空目的語(自分)	47.4 (27/57)
8 空目的語(彼) × slop	33.3 (19/57)
9 空目的語(彼女)	26.3 (15/57)
10 空目的語(自分)	87.7 (50/57)
11 空目的語(彼) × str	77.2 (44/57)
12 空目的語(彼女)	84.2 (48/57)

Sloppy読み

日本人グループはスペイン人グループよりも主語位置で sloppy 読みを容認した(タイプ1-3)。以下の通り、統計的に有意差傾向がみられた。

t検定:タイプ1-3 (p=.06, d=0.69)、タイプ1 (p<.05, d=0.91)、タイプ2 (p=.671, d=0.15)、タイプ3 (p=.118, d=0.50)

目的語位置(タイプ7-9)では、sloppy 読みに関して2グループ間でより多様な結果が容認率に関してみられ、日本人グループはスペイン人グループよりも容認率が高かった。2グループ間では、統計的に有意差がみられた。

t検定:タイプ7-9 (p<.01, d=1.21)、タイプ7 (p=.121, d=0.46)、タイプ8 (p<.01, d=1.28)、タイプ9 (p<.01, d=1.09)

Strict読み

スペイン人グループは日本人グループよりも目的語位置で strict 読みを許した。グループ間で統計的に高い有意差が確認された。t検定:タイプ10-12 (p<.01, d=1.14)、タイプ10 (p<.001, d=1.13)、タイプ11 (p<.05, d=0.61)、タイプ12 (p<.05, d=0.68)

②考察

日本人英語学習者が解釈した空要素は主語・目的語の両位置で sloppy 読みを許容した。これは、当該の sloppy 読みが動詞句削除の結果から生じているのではないことを示している。つまり、これらの場合の空要素は空要素の統語ステータスに関する先行研究(Saito 1985, Hoji 1987, Nakayama 1988, Fukui 1984 など)が主張しているような空代名詞の例ではない。スペイン人日本語学習者は sloppy 読みを許容したようにみえるが、データをさらに検証してみると、この結果は3つの実験文に限られている。よって、sloppy 読みの過度な容認率は、与えられた文脈と実験文の性質によるものととらえられる。おそらく絵がそのような過度な sloppy 読みを促した可能性がある。また、スペイン人グループによる strict 読みの容認率が日本人英語学習者よりもかなり高かったことは、スペイン人グループに解釈された空要素が空代名詞であるとすれば自然に予測されることである。

本研究におけるスペイン人日本語学習者の L2 文法では、母語の転移(影響)が観察されたが、興味深いことに Wakabayashi (2002)ではスペイン人英語学習者の L2 文法で主語位置において母語の転移がみられている。目標言語の文法に到達するためには何が引き金となるのだろうか。おそらく日本人英語学習者にとっては、英語には定冠詞・不定冠詞を含む決定詞や動詞の一致が存在し

ていることであろう（英語では空要素を許さない）。それらが肯定証拠となり、L2 文法において DP 構造が出現し phi 素性一致が可能となる。そして最終的に項削除の現象は起こらなくなる。スペイン人日本語学習者にとっては、日本語が定冠詞・不定冠詞を持たず、動詞の一致もないことから、肯定証拠が得られない。よって、スペイン人日本語学習者は日本人英語学習者よりも主語・目的語位置に関しては習得に遅れが出る可能性がある。

③言語学的な立場から

結論として、日本語とスペイン語の空要素ではその性質が異なることがいえる。日本語の空要素は項削除の結果であり、スペイン語の空要素は空代名詞である。

(3) 今後の研究に関する展望

今後は、特に空要素に関する習得の検証を通して、日本語、スペイン語、英語を母語とする英語、日本語、スペイン語の学習者（つまり6種類のデータ）から新たにデータを収集し、これまでの先行研究が空代名詞として考察を行ってきた部分を、新しい言語理論の枠組みである項削除の観点から再検証をしていきたい。実験デザインも、項削除の本実験実施までには、様々な要因（例えば、被験者が従属節を理解しているか、one's ownなどの代名詞を理解しているか、主語・目的語位置で空要素を許容するかなど）を考慮していく必要がある、慎重にL2の文法知識に関する予備調査をしていくことが不可欠であろう。このことは、本研究（代名詞習得の研究）が今後の研究の先行研究となったことで明らかになったことであるため、本研究は今後の研究において大変意義のある重要なものになった。

項削除の観点からの、空要素に関する第二言語習得研究の今後の成果が、言語理論および第二言語習得理論の発展に貢献するものになることを強く願いつつ、本研究の報告を終える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① Kazumi Yamada, Yoichi Miyamoto, The Acquisition of English Articles by Japanese Adult and Child Learners, Kwansai Gakuin University Humanities Review, Vol. 15, 2011, pp. 103-117 (査読無)

〔学会発表〕（計4件）

- ① Kazumi Yamada, Yoichi Miyamoto, Acquisition of Null Elements in SLA: A Comparative Study of Japanese EFL Learners and Spanish JFL Learners, Workshop on Language With and Without Articles 2012, MAR. 16. 2012, Université Paris 8, France
- ② 山田一美、冠詞選択のパラメータと日本人英語学習者による冠詞の習得、JACETリーディング研究会, 2011. 5. 22 関西学院大学大阪梅田キャンパス
- ③ Yoichi Miyamoto, Kazumi Yamada, Fluctuation in the grammar of Japanese Child EFL learners, Workshop on Language With and Without Articles 2011, MAR. 4. 2011, Université Paris 8, France
- ④ Yoichi Miyamoto, Kazumi Yamada, On NP-Deletion in the Grammar of Japanese Child EFL Learners. The 2010 International conference on Applied Linguistics, NOV. 27. 2010, National Chiayi University, Taiwan

〔図書〕（計1件）

- ① 山田一美、日本人英語学習者による冠詞の習得—ACPとFHの枠組みから、『最新言語理論を英語教育に活用する』藤田耕司・松本マサミ・児玉一宏・谷口一美（編）開拓社、2012、pp. 94-107

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 一美 (YAMADA KAZUMI)
関西学院大学・理工学部・専任講師
研究者番号：90435305